

1. いつも不機嫌な許嫁

侯爵家の第一子として生まれたわたくしは、貴族には珍しい相思相愛の両親の元で生まれ育った、侯爵令嬢だ。

そんなわたくしには、五歳にして許嫁と呼ばれる存在が出来た。

お相手の方の名前はアドルフ。わたくしより二歳年下の、子爵令息である。

当初の彼は僅か三歳だった。

他国の者にこの話をすれば、貴族の子息子女だとしてもあまりにも早い婚約だと驚かれることだろう。

しかしこの国では、男性の出生率がとても——とても低い。

何百年もこの状況が変わっていないので、専門家は難しい専門用語を並べて遺伝がどうかを正式に発表しているらしいのだが、残

念ながらその分野に明るくないわたくしではよく分らない。

これまた正式発表されている打開策としては、他国から沢山婿を取って自国民に異国の血を混ぜていくことであり、そうすれば長い時間をかけて少しずつ改善していく——とのことらしいが。

果たしてそれは本当に、自国の民と呼べるのかという疑問も出てくる。また、皆が皆他国から婿を取るというのは、国が動いてくれない限りは実現が不可能だ。

そして当の国は、先ほど挙げた問題を気にして、専門家が提示した改善案を採用出来ずにいる。

——要するに今も昔も変わらず、女性陣は数少ない男性の取り合いをして、最悪キャットファイトに発展するのだ。

そしてこれが、僅か五歳にしてわたくしに許嫁が出来た、理由なのであった。

* * *

そろそろ春が近付く今日この頃。

わたくしは婚約者のアドルフと、侯爵家のカントリーハウスのサロンで午後のティータイムを過ごしていた。

彼が五歳になった頃から——実に十七年も続いている毎月恒例の二人きりのお茶会だ。

私と彼はクッションを敷いた木椅子に座り、テーブルを挟んで向かい合っている。

「貴方もそろそろ卒業ね。学園生活は実りのあるものだったかしら？」

わたくしがチラリと上目に窺った先には、優雅に足を組んで座る婚約者様の姿がある。

彼は向き合うのが嫌なのか、体の向きを若干左にずらしていた。「……フン。そりゃあな。とっても充実したものだったさ」

口をへの字に曲げているものの、彼の容姿は大変麗しい。

煌めく金髪と鮮やかな瑠璃色の瞳。高い鼻とスツと通った鼻梁。今は伏せがちになっているが、普段はキリリとして形の良い瞼。背が高く、それなりに筋肉質。組まれている足はスラリと長い。とても整った顔の造形とスタイルの良さ。

声まで低くて甘い。その上、近付くといつも良い香りがする。とにかく、華のある人だ。

貴族学園では物凄く浮き名を流したことだろう。

——まあ性格は、あまり良いものではないのだけれど。

「君ではとても想像がつかないほどに、それはそれはもう素晴らし
い学園生活だったよ」

「そう。それは素敵ね」

いつも通りであるこちらを見下した発言に、わたくしは緩く笑いながら頷いた。

よくあることなので、いちいち反応してられないのだ。

「フンッ」

しかしこちらの反応が悪いと、それはそれでつまらないのだろう。アドルフはツンと顎を上げて鼻を鳴らすと、フイツとそっぽを向いた。

「……うふふ」

わたくしはと言うと、それにも笑って誤魔化すだけ。

アドルフが気難しいのは、今に始まったことではないのだ。

この通りわたくしの婚約者様は、性格に難があるのだが――

相手がどんな男性であつても、この国で結婚して子供を産めるこ

とは、それだけで幸運だ。

夫婦間で愛し合えないことは、確かに残念なことではある。だがとうに、諦めはついていた。

幸せな結婚生活を夢見ていたことがあったのは事実だが——そんな夢物語は、随分と前に見るのをやめた。

わたくしと彼では、性格が合わないのだ。仕方がない。

そんなこんなで今のわたくしは、どうせ恋愛結婚でもないのだから、夫の浮気くらい許すつもりでいる。

あまりにも沢山婚外子を作られると、それはそれで困るが——ただでさえ少ない男性を、わたくしだけが独り占めしてしまうというのも気が引ける。

せめても結婚後は女遊びをほどほどにしてほしいな、と思いがら。わたくしはカップとソーサーをテーブルに戻した。

「……領地経営はどうだ。先月から本格的に関わり出したと聞いたが」

「あら……？ふふ、気にしてくれてありがとう。でも貴方は何も、心配しなくていいのよ」

この国の貴族は、女性が当主となる。

私は幼い頃から領地経営を学んでいて、更なる学びのために女学校にも通っていた。

卒業したのは一昨年。

卒業後はずっと母の手伝いをして経験を積んでいたのだが、先月になって自主的に動いていいと許可が出た。

「……………」

アドルフは私の返答を聞くと、ムツツリと黙り込んでしまった。

結婚後も好きなことをして過ごせばいいと言ったのに、気に食わ

なかったのだろうか。

わたくしは首を傾げて思案する。

——しかしいくら考えたとして、時間の無駄だろう。

彼曰くわたくしは、わからず屋らしい。だから何が彼のプライドを傷付けたのか考えても、わたくしには分からない。

何より彼はいつも、わたくしの前では不機嫌そうなのだ。

今更か、と考えてわたくしは紅茶のカップを再び持ち上げた。

「君は、いつもそうだ」

「……ん？ごめんなさい、聞き逃してしまったわ。何とおっしゃったの？」

「……………」

隣国から取り寄せたというストロベリーティー。それがあまりにも美味しすぎて、婚約者様の声を聞き逃してしまった。

もう一度おっしやつてと右手を差し出すが、彼はプイツと横を向いてしまった。

（あらあら。……やっぱりまだ、子供ね）

二歳しか歳は変わらないのだが、男性の方が女性より精神年齢が低いと聞く。

昔から変わらない態度に少しだけ苦笑して、わたくしは目を伏せた。

（年下の男の子に、感情的になるのはよくないわ）

自制し寛大な心をもって、己を律する。

そうして気持ちを切り替えたわたくしは目を開け、彼に優しく微笑みかけた。

「……フンッ」

しかしやっぱり、婚約者様は不機嫌そうだ。

またしてもそっぽを向き、体はより左に向いてしまった。

（うーん。今日は挙式の打ち合わせをしたかったのだけれど……）
アドルフはもうすぐ貴族学園を卒業する。

そしてその後すぐに、わたくし達は結婚する予定だ。

式の準備は半年をかけて整えられ、何の問題もない。

あとは当日の流れを二人で確認して、頭に叩き込むだけなのだが

（まあ……わたくしが彼を誘導すればなんとかなるわよね）

不機嫌そうにしているし。別に、とやかく指図してもっと機嫌を悪くする必要はないかと。

わたくしは一人で納得して、紅茶で喉を潤した。

* * *

そうしてやってきた挙式の当日——アドルフは予想以上に、不機嫌だった。

会場となった侯爵家のタウンハウスには今、沢山の招待客が来ている。

挨拶回りを一時中断してアドルフと共に休憩がてらに庭園を歩いていたわたくしは、右手を乗せていた彼の左腕を、そっと抱き寄せた。見上げた整ったかんばせが、右眉だけ器用に上げてわたくしを見下ろす。

「後ほどある会食で貴方の好物が出る予定よ。だからちよつとだけ、笑って見せてくれるかしら？」

「……………」

今後のためにも、招待客に仲の良いところを見せておきたくて。
わたくしは本日夫となった彼に、そう囁いた。

長い付き合いではあるのだが、何をすれば喜ぶかなんて知らない。
だから辛うじて知っていた彼の好物で釣ろうと考えたのだが――
どうやらそれは、失策だったようだ。

アドルフはぶるりと体を震わせると、怒りを露にした。

こちらを睨め付ける青い瞳が、ギラギラと怒りに燃えている。

「君はほんとうに、僕をいくつの子供だと思っているんだ……！」
「えっ？」

機嫌を取るはずが、彼の怒りが爆発してしまつて。勢いよく腕を
振り払われ、呆然とする。

「君はいつも、いつも！仕方ない子ねという目で僕を見て……！」
「あつ、えっ？アドルフ？わたくし……！」

そんなつもりじゃないのと咄嗟に否定しかけたが、実際そんなつもりは大有りだ。

だからこそ言葉が喉に引っ掛かり、わたくしは燃え盛る彼の怒りに薪をくべることになってしまった。

「いつまで経っても子供扱い！ 僕はもう、成人したんだぞ！ ぐうう……っ」

何も言えずハクハクと唇を動かすわたくしの肩を、彼はガシリと両手で掴んだ。

いつもは冷たい瑠璃色の瞳。それが今はギラギラとした光を放ち、わたくしを睨み付けている。

わたくしとアドルフは不仲である。

しかしこれほどまでに衝突したことはなくて。どうすればいいか分からないわたくしの脳内は、真っ白に染まっていた。

「くそ……！」

「あ、あどるふ……」

ショックで愕然としているわたくしの肩から、彼は手を離した。そしてその両手で、上げている前髪をグシャグシャと掻き乱す。

「……あ。だめよ……せっかくセツトした髪が」

未だ混乱の渦に飲まれているわたくしは、明らかに今、言わなくて良いことを口にしてしまった。

純白の正装に身を包み、めかしこんだ彼がとても素敵で。つい見惚れてしまったものだから、髪がグシャグシャになってしまうのは勿体無いと感じたのだ。

なのにその言い方は、最悪だった。

たった今不快だと告げられたばかりなのに、ついいつもの調子で声をかけてしまったのだ。

「こんんなにも僕が心を乱しているのに！僕の心配より、周りからの評価の心配かつ!? 婚約者の僕とその他大勢の人間、君は一体どちらが大切なんだっ!？」

「え、——えっ？」

予想外な方向から、噛み付かれて。白い歯を見せる夫に、まるで獣のように威嚇される。

それにしても彼が口にした台詞は、恋愛小説でたまに見かける『私と仕事と、どっちが大切な!?』のニュアンスに似ていた。

わたくしのことを毛嫌いしているアドルフの口から出たとは、にわかには信じ難い。

「僕だって、もう大人なのにつ！大人の男なのにつ！君の、夫になつたのに……っ！」

「あ、あ、アドルフ、落ち着いて……?」

地団駄を踏む見目の良い青年。しかも本日の主役ひとり、花婿だ。そんな彼が真っ白な礼装を身に着けて、セットした髪を乱して、芝生を踏みつけている。

「今に、見ていろ……！今夜は初夜だっ！君を、理解^{わか}らせてやる……っ!!」

「え、わかっ？あ、アドルフ……!？」

よく分からない宣言を終えた後。アドルフは肩を怒らせながら、踵を返してしまった。

そのまま彼は白い革靴でズンズンと芝生を踏みつけて、どこかに行ってしまふ。

そうしてわたくしが呆然と動けずにいると、彼の背中は小さくなつて消えてしまった。

「ああ、どうしましょう……っ」

彼が消えた庭園の一角を見つめたまま、わたくしは困り果てる。

結局碌に言葉を返せなかったばかりか、おかしなことを言っ
て余計に怒らせてしまった。

謝りたいと思うのに——今のわたくしはそれよりも、まだ終わっ
ていない挨拶回りをどうしようかと憂慮している。

（わたくし……今はアドルフの心配をしなければならぬのに……）
己の自分本意な思考に落ち込み、虚無感に襲われる。

夫のことより、体面を気にするだなんて。こんなの嫌われて当然
だと自分を責め、気分が深く沈む。

「……………」

わたくしはお腹の前で重ねた手を、キュツと握り込んだ。

ツンと鼻の奥が痛んだが、メイクが崩れるので泣くわけにはいか
ない。

（泣いたと分かれば、何かあったと気付かれて噂になって——ああ）
また自分の体面を気にしている。

ここで素直に泣けば、可愛げがあるものだろうに。わたくしにはそれが出来ない。

薄々勘づいていたが、彼がわたくしを嫌うのはただの毛嫌いではなく、きちんとした理由があるのかもしれない。

ではなければ十七年もの付き合いがあつて、未だに嫌われ続けていることに説明がつかない。

わたくしはわたくしで、深みにはまりたくなくて自分から積極的に親しくなろうとはしていなかったのだが——

それでもやっぱり、今の関係になっているのはわたくしの人間性に問題があるからなのだろう。

だって彼は、わたくし以外の人にはとても紳士的なのだから。

（きつとわたくしと結婚なんて、したくはなかったのでしょうね。

……彼に、申し訳ないわ）

格上の家からの婚約の申し出。きつとどんなに嫌でも、断れなかったのだろう。

——その結果がこれだ。

わたくしだけが自分の子供を腕に抱ける喜びを抱いて、彼の幸福を踏みにじってしまう。

「どう、しましように……」

一分が経ち、二分が経ち、それから五分が経っても。わたくしはこの場から動けなかった。

仕事では速やかに判断を下せるのに、今は何の解決策も浮かばない。
い。

一人で会場に戻ろうにも、そうするわけにはいかなかった。

そんなことをしようものならどこからか二人は不仲だという噂が立って、アドルフに愛人が沢山出来る結果に繋がるだろう。

愛されない新妻と、新婚早々に沢山の愛人に囲まれる夫。

前者となるわたくしは、なんと惨めなのだろうか。

自己嫌悪と将来への悲嘆がグチャグチャに混ざり合い、わたくしの脳内で廻る。

泣いては駄目だと分かっているのに、いよいよ本当に泣いてしま
いそうだ。

「……あらっ？」

ぼんやりと悲しみに暮れていると、見つめる先になにかが見えた。
それは少しずつ大きくなっていき、アドルフの形だとわたくしに
知らしめる。

数分前とは逆に、どんどんとアドルフの体が近付いているのだ。

——戻ってきてくれた。

そう気付いたわたくしは、酷く安堵する。

まだ何も解決していないが、両親が張り切って整えてくれた式を台無しにせずに済む。妹だって、ニコニコして祝ってくれたのだ。

家族をガツカリさせないで住む安心感からか、思わずホロリと涙が一粒だけ零れた。

だがメイクが崩れないようにと、わたくしは慌てて指先で払う。

「な……っ！」

すぐ傍から彼の声がして、わたくしは顔を上げた。

長い足をいかんなく発揮して、あっという間に目前まで迫ってきていたようだ。見上げた端正な顔立ちは目を真ん丸にして、唇をわなわなと震わせていた。

「なっ、なっ、ない……っ」

「……？どうしたの？」

何が無いのだろうかと言を傾げると、アドルフは水気を払う犬のようにブルブルとかぶりを振った。

せっかくセットした髪は、もうめちゃくちやだ。

わたくしはせめても手櫛で整えようと右手を伸ばしかけるが、すぐに引っ込める。そんなことをすれば、きつとまた怒らせてしまう。

「くう、うう……！」

「アドルフ……？」

両手に拳を作ってギリギリと握り締めるアドルフは、強く目を閉じて俯いている。

どこか具合でも悪いのだろうかと言で腕に触れて顔を覗き込むが、彼はまたブンブンとかぶりを振った。

それから顔を上げたアドルフはギツとこっちらを睨み付けて。そ

れからすぐに、目を見開いてポカンと口を開け放った。

「っ、き、きみは……！なんて顔をしてるんだ！」

「え、顔……？顔が何……？」

またしても怒らせてしまつて、わたくしはもう何が何だか本当に分からなくなつてしまった。

「くっ、このっ、かわ、くう……！」

「きゃっ!!」

どうしていいのか分からず途方に暮れていると、ガバリと抱き締められた。逞しい腕を上半身に巻き付けられて、左の首筋に顔を埋められている。

「……??」

突然の抱擁に目を白黒させて、わたくしは緩慢な動作で頭を右に倒した。

「フーツ、フーツ、ふぐう……っ」

「え、ええと……」

予想外なことが起こりすぎて、一周回って落ち着いてきた。さっぱり何一つ状況が飲み込めないが、とりあえずアドルフが戻ってきてくれて良かった。

「わわ……っ」

気を持ち直しかけたところで、わたくしはグイツと肩を押された。密着した体を引き剥がされたのだ。

くつつくのも離れるのも彼次第で、なんとも理不尽である。

不服に思ったわたくしの唇が、勝手に尖った。

「す、捨てられた子犬みたいな顔をしてても駄目だか……おあッ!? なんだそのかわ、イヤッ……、その……駄目だからなっ!」

「捨てられた子犬……? だめ……? ? ?」

何故だかまたぎゅうぎゅうに抱き締められながら、わたくしは尚も叱られている。もう完全にお手上げだ。

——なんだかドツと、疲れてしまった。

彼はまたしてもフーフー言っているが、もう構ってられない。とにかく抱き締められたということは、彼にも仲直りする意志があるということなのだろう。真偽は不明だがもうそれでいい。

（それにしても——アドルフは意外と、体がガツシリしているのね）思考を多少強引に締め括った後、わたくしは違うことが気になりました。

乳房が形を変えるほどに押し当てられている胸板には、意外と厚みがある。

躊躇いながら背中に触れれば、そこからも筋肉の隆起を感じた。どうやら着痩せするのは、女性だけではないようだ。

単純なわたくしは途端に彼を意識してしまって、初めて経験する男性との抱擁にどぎまぎとし始める。

しかし、このままではいけないと。わたくしは一大決心のもと顔を上げた。

「ねえ、アドルフ……？」

「くう、このタイミングで名前を呼ぶなんて……っ！ 僕をどうしたんだっ」

そっと右手を胸板に当てて見上げると、赤い顔でギツと睨み付けられた。

せっかく出した勇気が萎んでしまって、わたくしは困惑しながら顔を俯ける。すると意識が、右手に集中してしまった。

服越しに触れている胸板の感触を、つぶさに感じ取ってしまったのだ。

平ら——いや、少し盛り上がっていて、弾力のある胸筋。

わたくしのように脂肪の塊がついて、胸が前に突出しているわけではないのだ。

それに腰と背中に触れている彼の手はとても大きくて、それにもまた驚いてしまう。大きな手ねと眺めたことはあったが、触れられて余計にそれを感じた。

（これが男性の体——）

謝ろうとしていたことも忘れて、わたくしはぼやんとする。

それは、女学校時代からの友人のものとも、妹のジェシカのものとも違う。

未だにアドルフはブツブツと文句を言っているが、今のわたくしはそれどころではなくなっていた。

何故かは分からないが、大きくて熱い手が優しく背中を撫でてく

れている。

その触れ方は普段の冷たい彼の態度からかけ離れていて、わたくしの頭はそのギャップにクラクラとしていた。

「……はあ。そろそろ、会場に戻るぞ。あんまり長く席を外しすぎると——からかわれるだろうからな」

「え、ええ……」

アドルフがハグを解いて至近距離からわたくしの顔を見る。

いつも通りの、きらきらしい顔立ちだ。

もう怒りの色は見えなくて、ホツとする。

しかしわたくしがよっぼど情けない顔をしていたのか、今度は肩を撫でられた。

再度彼の顔を見上げて、わたくしはパチリと目を瞬かせる。

いつもとは違って、彼が困ったように笑っていたからだ。

そしてそんな彼の周囲が、何故だか煌めいて見える。

目の錯覚かなと不思議になって、わたくしは右手で目を擦った。

「……どうした？目にゴミでも入ったか？」

「い、いいえ？ううん……」

やっぱりキラキラして見える。おかしい。

もう一度目を擦ろうとして、その手がパシリと取られた。

「眼球を傷付けるのは得策じゃない。見せてみる。どうせ、睫毛でも入ったんじゃないのか」

「ええ？あの、アドルフ……？」

右手を握られたまま、左頬に手を添えられる。

優しく上を向くようにと促され、顰めっ面の許嫁——いや。夫が、わたくしの顔を上から覗き込んだ。

わたくしのものより大きな親指が、下瞼をクイツと下に引っ張る。

「何も、見当たらないが……」

「……っ」

いつも彼が愛用している甘くスツキリとしたコロンの香りが、鼻腔を擽る。

顔が近いため喋ると顔に吐息がかかるが、嫌な匂いはしない。

そう言えば誓いの口癖の際も、口臭は無いように感じたと思い出して——わたくしは墓穴を掘った。

（なにかしら、とつても恥ずかしいわ……っ！）

どうしてかは分からないが——

わたくしより薄くて、わたくしより大きい。そんな唇と触れた瞬間を思い出して、わたくしは落ち着かなくなってしまった。

その時は無感情に受け止めて、五秒経っても離れなかったので疑問に思い、片目だけ開けてみたものだが。今になって考えると、ど

うしてあんなに平常心でいられたのかと不思議になる。

「お、おい。顔が赤く、なっているぞ」

わたくしの顔が赤いと指摘するアドルフの顔もまた、赤かった。不遜にそれを指摘した彼はゴクリと喉を鳴らして、目の下に触れていた親指でわたくしの頬を撫でる。

「目を閉じ、いやっ……、——……っ!？」

壮絶な色気を放ちながらゆっくりと顔を寄せてくる。そうして距離を詰めていたアドルフだったが、途中で弾かれたように勢い良く振り返った。

ぼんやりとしながら目を閉じかけていたわたくしも、物音がした方向に視線を向ける。すると二階のバルコニーから、招待客が歓談しながら出てきたところであつた。

「いっ、今のは何でもない。何でもないからな！」

「え？ え、 ええ……」

他人の姿を目にしたからか、 わたくしの湯だっていた思考は急速に冷めていった。

離れた体温を恋しく思っ
て首を傾げはするが――

頬を赤くしながら威嚇するようにこちらを睨んでくるアドルフを
目にして、冷静になる。

いつも通り、気難しいアドルフだ。周りがキラキラしていない。

「会場、戻りましょうか」

「くう……！ 今に見ている……！」

今夜だぞ！ と言ひ募って、彼はわたくしに左腕を差し出した。

その腕に手を掛けながら――わたくしは。そういえばどんなに機嫌が悪くとも、エスコートを投げ出すことはなかったわね、
と思ひ出していた。

2. (彼にとっての) 決戦の時

わからせるって、何かしらね——？

侯爵家のタウンハウス。わたくしの私室から繋がる浴室にて。

侍女に体をピカピカに磨かれながら、わたくしはぼんやりと考え
ていた。

きつとご学友との間で流行っている、社交の場では使えない言葉
なのだろう。

人数が少ないとは言え、貴族学園にはアドルフ以外にも男子生徒
がいる。同性の友人がいるとは、学園内に放っている情報提供者か
ら聞いていた。

(アドルフはこれまで、一体何人の女性と……関係を持ったのかし
ら)

協力者には子供が出来たという場合を覗いて、彼の女性関係について、報告はしなくて良いと伝えてあった。

彼と同じ貴族学園に通う妹にも話さなくて良いと伝えているため、わたくしは本当に彼の女性遍歴を知らない。

アドルフはいつもわたくしに横柄な態度を取るが、それはわたくしと二人きりの時だけだ。

わたくしの家族の前では好青年然としているし、他の女性への応対もスマートである。どんな相手にも公平に紳士的なのだ。わたくしを除いて。

それはそれは学園でモテたことだろうと思うが——それはそれとして、結婚相手を見つけられない女性陣は、飢えた獣の如く勢いで迫ってきていたことだろうと思う。

貴族学園はきつと、狩り場と化していたに違いない。

（通ったのが女学校で良かったのかもしれないわね……）

最初はわたくしも、貴族学園に通うつもりでいた。

けれどアドルフから猛反対されて、就学先を変えたのだ。

きっとわたくしと同じ学校だと遊びにくいのね、と呆れたものだが、女学校は貴族学園より教育レベルが低いわけではなく。それどころか僅かに上だったので、大人しくわたくしはそちらを選んだのだった。

（さて、いよいよね）

湯浴みを終えてスケスケで破廉恥な夜着を着せられたわたくしは、ガウンを羽織って夫婦の寝室の前に来ていた。

三日後に領地へ帰る予定なのであまり使う機会はないのだが、若夫婦用に改修は済ませてある。

私の部屋とアドルフの部屋から、寝室に繋がる構造だ。

「よしっ」

いざ、と気合いを入れて、ドアノブを掴む。

そうしてドアを開けて広い寝室内に足を踏み入れたわたくしは、まず首を傾げた。

(……?)

ワイン瓶を抱き締めるようにして抱えたバスローブ姿のアドルフが、ぶつくさ言いながら右へ左へとうろついている。

よほど考え事に集中しているのか、ドアが開いたことに気付いていない様子だ。

わたくしは取り敢えずそつとドアを閉めて、足音を立てないようにと注意して彼に近付いた。

「できる、できるさ。僕なら出来る。だから酒に逃げるんじゃない。……いや、でもちよつとくらい」

どうやら初夜の前にお酒で気を紛らわすかどうか、悩んでいるよ
うだ。

(……ふうん)

そんなにわたくしを抱くのが嫌なのかと、げんなりする。

可哀想ではあるが、貴方の気持ちが追い付くまで待ちますわ、な
んて殊勝なことは言ってられない。

家の存続のためにも、跡継ぎは必要なのだ。

何より、先に婚外子が産まれてしまつては困る。

昼間は嫌われていることを再確認して落ち込んだりもしたが、貴
族の次期当主として甘ったれたことは言っていられない。

しかし妙に荒んだ気持ちになつて。わたくしは少し、意地悪をし
てやることにした。

「……そんなに気が向かないのならば、今日はやめておこうかしら」

「……!!」

もちろん口先だけの宣言ではあるのだが、妻の気分を害したと存分に慌てるがいい。

昼間にした結婚早々の喧嘩と、今日にした初夜を忌避している様子。わたくしが悪いのかもしれない。けれどとても、気に障った。

慌てて振り返ったアドルフは青い瞳を真ん丸にして、驚いた顔でわたくしを見下ろしている。

「そんな、とんでもないっ！」

「えっ？」

予想外の反応だ。暗く沈んでいた思考が一気に吹き飛ばされる。

わたくしの予想では「いや、そのっ」と慌てるか、開き直って「フンッ。それならそれで僕は一向に構わない。精々子種がほしいと、泣きつかないことだな！」くらい言ってくるかと思っていた。

なのに当の彼はブンブンと首を横に振って、ワイン瓶を抱えたままズイツとわたくしに顔を寄せてくる。

「今更お預けだなんて、あんまりだっ！」

「ええっ？」

これまた予想外な反応だ。

わたくしがした後ろ向きな発言を、咎められてすらいる。

「結婚したんだ、君は責任を取るべきだろうっ!？」

「えええっ？」

まるで浮気性の夫に詰め寄る妻のようなことを言われている。

アドルフはハツとしてワイン瓶に視線を落とすと、そそくさとそれをテーブルの上に置いた。

それからすぐ傍まで寄ってきて、左からガツシリとわたくしの肩を抱く。

「ほら、早く寝台にいくぞ。それに昼に、理解らせるって言ったじゃないか。もう忘れたのか？」

「え……？いいえ？忘れてはいないけれど……」

わたくしは困惑したまま、彼と共に寝台へ向かう。

逃がさないためにかしつかりと肩を抱かれていて、少し歩きづらい。だがいい機会なので、気になっていたことを聞いてみることにした。

「ねえ、理解らせるってなあに？」

「ぐ……っ、なんだその聞き方は……！くうっ」

わたくしの肩を抱いたまま、アドルフは左手で顔を覆って呻いた。彼の足が止まったため、必然的にわたくしの歩みも止まってしまう。

寝台は目前だ。ちよつとドキドキしてきた心を落ち着けるためにも、わたくしはそこから目を逸らした。

そして何かおかしかつたかしらと己の言動を振り返る。
しかし、特におかしいところは無かつたように思えた。

（アドルフって昔からたまに、様子がおかしくなるのよねえ……）
昼間は動揺してしまつたが——冷静に考えると、ああいう事は昔からままあることであつた。

婚約者時代の彼の奇行を思い出していると、自然と気持ちが凜い
でくる。

同年代の子供達が集まる和やかなお茶会でわたくしが他の子達と
仲良く話していると、唐突に近付いてきて。かと思えば、急にわた
くしの頬を引っ張つたり。

女学校で仲良くなつた友人と一緒に買った香水をつけて、それを
彼に自慢すると。何故か彼の coron を容赦なく吹きかけられたり。

そのお友達とカフェに行つて食べたケーキが美味しかったと話す

と、後日張り合うように「僕はあれとこれとを食べてきた！」とおおよそわたくしでは食べきれない量を一回で食べてきたと主張されたり。見目はとことん良いがふとした拍子で奇行に走る、アドルフである。

「ふう、ふう。よし。いくぞ……」

「ええ……」

気を取り直して間近にある寝台に向かい始めるアドルフに、わたくしはつい、なんとも言えない視線を向けてしまった。

学園生活は、大丈夫だったのだろうか。

奇行の報告は入っていなかったが、今になって急激に心配になってきた。

（——ああいえ、アドルフは他の女性には対応がスマートなもの。ただの杞憂ね、きっと）

それならどうしてわたくしにだけあんな奇行を見せるのか——と疑問を抱くが。その時丁度、寝台の前に到着した。

左から肩を抱かれたままわたくしは彼と一緒に、寝台に腰かける。

「っ、……ふーっ。うん。……、……ふーっ」

「……大丈夫？」

なんだかなり、緊張している様子だ。

顎を引いて上目に顔を見つめると、正面をジッと見つめていた彼の目がこちらに向く。そしてバチリと、視線が合わさった。

「……ッ！」

「あらまあ……」

アドルフは茹で蛸のように顔を赤く染めて、ブンツそっぽを向いてしまった。

きつと何かが気に障って、怒ってしまったのだろう。

わたくしは右手で頬をそっと押さえ、溜め息を吐く。

こんな様子で初夜の完遂など出来るのだろうか。

「ねえ、しっかりして頂戴。わたくしをわからせる、のでしょう？」

「当然だっ！……あ、ぐう……」

勢いよく顔をこちらに向けて、わたくしを見たまままた唸る。

少し呆れて、わたくしは鼻から息を吐いた。

「う、うう、うう……」

青い瞳が、恨めしそうにわたくしを見ている。

しかしその視線はわたくしの目元から鼻先、鼻先から口許へと滑っていった。

瞬きをしながらその様子を見守っていると、再び目が合う。

「あう……」

「アドルフ……？」

彼がしよぼしよぼと眉尻を下げたと思えば、体を包み込むように抱き締められる。

逞しい腕にあれよあれよと抱き寄せられ、持ち上げられて。気が付けばわたくしは、彼の膝を跨いで座っていた。

「はう……♡」

「もう、なんなの……？」

腰に腕を巻き付けて体を拘束されながら、下からジツと顔を覗き込まれている。

腿裏に感じる硬い太ももの感触にどぎまぎとしながらも、わたくしはただ、困惑していた。

せめて何か言ってくればいいものの、彼は意味不明な呻きを口から発するばかりだ。

「ねえ、アドルフ。何か言ってちょうだい」

「はあ、う、うむ……っ♡」

何か言つてと頼んだ返答は、わたくしの名前だった。

釈然としていない中で胸元からお腹、お腹から下腹部、そしてガウンからはみ出している足へと、彼の視線が移動する。

そうして体を撫でた挙げ句、彼の視線はわたくしの胸元に戻った。

「ん……っ」

ガウンの上から左の乳房に口付けられて、何故だかお腹の奥がキユンとした。

それを不思議に思つて首を傾げていると、下からズイツと整ったかんばせが近付いてくる。

「きす、するよ……?」

「え、ええっんむ!」

やたらと拙い声で断られて、頷き切る前に唇を奪われた。

柔らかな感触に吸い付かれ、心臓がドキドキと早鐘を打つ。

ちゅうちゅうと優しく吸われる度にゾクゾクとした甘い痺れが腰に流れ込み、わたくしはビクリと体を震わせた。

——しかし、それよりも。

アドルフの体の方が、ガタガタと震えている。

「あなた、だいじょつ——ぶうっ!？」

心配して問いかけようとした瞬間。

開いた口の隙間に、ぬろりと熱いものが入り込んだ。

軟体動物めいたそれは、アドルフの舌だろう。

「はーっ♡んむっ♡はっ、んぢゅるっ♡」

「あに、んんっ! はふっ♡あ、んっ♡」

わたくしは口腔内に舌を押し込まれて、柔い粘膜をあちこち舐め回される。

後頭部に右手を添えて固定され、噛みつくように口付けられているのだ。

「ま、あむっ！ん、むうッ♡あど、ふああっ♡♡」

「フーツ♡フーツ♡んちゅっ♡♡んむむうっ♡♡♡♡」

咄嗟に肩へ触れた右手でどうにか彼の暴走を止めようとするが、押しても引いてもビクともしない。

時折歯が触れ合ってカチリと音がするのに、彼は気にもとめていない様子だ。

「おちっ、あん！おちる、んむうっ♡」

あまりにもグイグイと迫られるものだから。今やわたくしは彼に抱き込まれているも同然で、両足が宙に浮いていた。

後ろに傾いた体は彼の手が離れれば、簡単に床へ落ちてしまうだろう。痛い思いはしたくないので、わたくしは必死に彼の体へ縋り

ついた。

「ぷはっ！ はあ、 はあ……っ」

「はっ、 はあっ、 はあっ！」

「あ、 あ、 アドルフ？ ねえ、 ちよっと落ち着——」

やたらとねちっこい口付けから解放されて、 どうにか宥めようと
するものの——

再びがぶりと口に食らい付かれたわたくしは、 またしても大きな
舌の侵入を許してしまった。

口腔内で好き勝手に動き回る舌は、 押し返そうとしても絡み付く
ばかりで制御などできやしない。

「はふっ♡ はっ♡ んぢゅるっ♡ はあっ♡ んぢゅっ♡」

「んんっ！ ん、 ふ、 んうう……！」

必死に押し返そうとして、 見つかってしまったのがいけなかった

のだろう。

肉厚な舌がわたくしの舌にしつこく纏わり付いてくる。

あまりにもベロベロと舐め回されるものだから度々逃げを打つのだが、執拗に追い回されては掴まっていた。

「ふぐっ♡ふっ♡フーッ♡はっ、んふうっ♡♡」

「きゃッ!? な、あんっ♡んんん……!」

グルンと世界が回って、背中がぼすりと柔らかな物の上に落ちた。ハツとして目を開けると、目前には瞑目してわたくしの口内を容赦なく舐め尽くす夫の姿。——と、僅かに見える白い天井。

（顔が、動かないっ!）

大きな手で顎を固定されていて、まんじりとも顔が動かせない。続いて身動ごうとするが、逞しい体で捕らえるように囲まれている——こちらもほとんど動けない。

困ってしまったって彼の顔を見上げるが、アドルフは目を閉じてうっとりわたくしの舌を舐めるばかりだ。

「ねえ……ん、ふっ♡あど、んむうっ♡」

唇すらも念入りに舐められて、口の周りが彼の唾液でベタベタになっていく。それでも不快感はないのだから、不思議なものだ。

——そんな呑気なことを考えている場合ではないのだけれど。

「っ、はーっ♡くうっ♡……っっ♡♡」

「あ……っ！まって、一旦落ち着いてっ」

ガウンの隙間から入り込んだ熱い手が、左の太ももに触れた。掴んで太さを確認したあと、やたらねっとりと撫でられる。

その間わたくしはしきりに、名前を呼ばれていた。

どうにも恍惚としている彼の様子に、わたくしは首を傾げる。

「ああ、はあ……♡ん、ふうっ♡♡」

「あ、アドルフ？ンッ♡なんだか貴方、様子が……っ」
ちゅ、ちゅっ♡と時折唇に口付けられながら、尚も繰り返し名前を呼ばれている。相変わらず太ももを撫でられていて、わたくしはそれにもまた、どぎまぎとしていた。

わたくしの瞳を一心に見つめるアドルフは、まるで陶醉しているかのようにうつとりしていた。

常にならないその様子が心配になって声をかけるものの、口付けは止まない。

「ああ、んふっ♡はふっ♡んぢゅっ♡はあっ♡♡♡」

「ん、むっ！はあ、んんッ！ン、んうっ♡」

わたくしは名前を呼ばれながら口内をベロベロに舐め回され、左足に手を這わされる。

アドルフはわたくしの足の付け根を親指で優しく擦り、かと思え

ばまた太ももを裏側まで丁寧に撫でて。膝や脰ら脛まで、念入りに愛でていく。

「ん、んッ♡くすぐっ、たいっ♡」

「ふああ……♡かわ、いい……♡」

優しい手付きで肌を撫でられる感覚に悶えていると、おおよそ彼が言いそうに無い言葉が耳を打った。

まさか、聞き間違いよね？と疑いながらもわたくしは耳を澄ませ、今度はきちんと聞こうと意識を集中する。

「む、むねっ♡さ、ささ、触る、からな……♡」

「えっ？……あ。え、ええ」

今の彼の意識は、わたくしの胸元に向かっているようだ。

確認することが出来なかったことを少し残念に思いつつ、わたくしも胸元に視線を落とす。

重ねたガウンの胸元には、彼の右手人差し指が差し込まれていた。それを確認したわたくしはしゅるりと結んでいた紐をほどいて、彼の顔に視線を戻す。

彼からは、窺うような視線が向けられていた。

失礼ながらその様子を、わたくしはヨシを待つ犬のようだと思っ
てしまった。

「い、いいわよ？ どう」

ぞ、と言い切る前に、布地がグイッと右に引っ張られる。

きゅと声を上げて驚いていると、見下ろした先でスケスケの夜
着が姿を表した。

「な、な、な……っ！」

真っ白な総レースで、丈が太ももの辺りまでしかないネグリジェ
だ。当然、肌は透けて見えている。

わたくしは恥ずかしくてそっと視線を逸らした。

今も胸の先は——きつと透けているはず。

それを見てしまっただろうアドルフは、カチンと体を硬直させて
ふるふると手を震わせていた。

「——ぐッ！」

「……………んっ？」

アドルフはビクンと体を跳ねさせて、小さく呻いた。

わたくしが見やると彼は慌てて、左手で股間を押さえる。

（あら、このにおい——）

青臭いにおいが、どこからか漂ってくる。

スンと鼻を鳴らしたわたくしは、ハッと息を飲んで右手で口を押
さえた。けれど次の瞬間には、何でもないのよという顔をして、右
手を寝台の上に戻した。

「……………」

「あ、アドルフ……？」

彼はと言えば、おずおずと体を起こすと寝台の上に座り込んだ。膝を抱えて、ガツクリと項垂れている。

意図せず放ってしまったことを、酷く後悔しているようだ。

閨教育では、男性はこういう事柄に非常にナイーブだと教わった。すぐにフォローしないと、今後の結婚生活に甚大な影響が出ることになるらしい。

わたくしは落ち込んでいる姿を見ていられなかったこともあって、彼を慰めることにした。

そそくさと体を起こすと、彼の左隣にピタリと寄り添って座る。

「わたくしで興奮してくれたのよね？ ありがとう、とっても嬉しいわ」

「……………」

膝を抱えている手にそっと触れて、どうにか励ます。

しかし膝に額を当ててズドンと落ち込んでいる様子の彼は、一向に顔を上げない。

「わたくし……、わたくしは——初めてだから」

「……!？」

彼の左手を撫でながら思考を巡らせ、言葉を選ぶ。そうして話の方向性を決めていく最中で、アドルフは反応を示した。

「どう対応すれば分からなくて、受け身にばかりなってしまっていたわね。少しずつ慣れていくから、許してちょうだいね」

「……は、はじめて？ 本当に？」

アドルフは俯けていた顔を僅かに上げて、横目にこちらを見ている。わたくしはそんな彼に意識して優しく笑いかけ、ゆつくりと頷

いた。

「ええ、そうよ。はじめて。……しらなかった？」

「……ああ。てつきり閨教育で破瓜したのかと……」

この国の女性には、性的に悦ばせて男性に選ばれようとする傾向がある。

だから面倒がられる場合も多い純潔は、成人する前に受ける閨教育の一環で、器具を使ってプツリと破ってしまうことが多いのだ。

当然それは始まりでしかなく、そこからは男性を悦ばせる術を習得していく。

「じゃあ、招いた男性講師と実践講習というのもなかったのか……？」

「ええっ？ そんなことをする家があるの……？」

器具を使って男性の悦ばせ方を学ぶと言うのは聞いたことがある

が、実践講習は初耳だ。

わたくしがあんぐりと口を開けて驚いていると、顔を上げたアドルフもまた驚いたように目を見張った。それから静かに、彼は頷く。そんな世界もあるのねと未だ驚愕に包まれながらも、わたくしは弁明をする。

「少なくとも我が家は、母の方針で純潔を婚姻相手に捧げることになっているの」

「そう、なのか……」

アドルフに説明しながらも、わたくしは思春期の頃に母から優しい声色で告げられたことを思い出す。

「お母様は周囲の反対を押しきって、お父様に初めてを捧げることにしたらしいの。そしてその結果、お父様はとっても喜んでくれて。お母様も忘れられない思い出だと話していたわ」

「それは……素敵なことだな」

わたくしと同じ気持ちを抱いてくれたアドルフに、嬉しくなる。

わたくしはにつこりと笑って、大きく頷いた。

「お父様はね、お母様と結婚して二十年になるけれど——一度も浮気をしていないのよ。二人は今でも、とっても仲良しなの」

「……………」

ワクワクしながら言葉を紡いでいたわたくしは——そこで、ハツとした。

これではアドルフの行動を制限しようとしているように聞こえる。わたくしは、『でもそれはそれだから』と——貴方は好きに過ごしていいのよと付け加えようとして、口を閉じた。

熱い手にそっと、右手を取られたからだ。

「……その。実はな」

「は、はい」

固い声に名前を呼ばれて、重大な事実を打ち明けられそうな予感に緊張が走る。

一体、何を告げられるのだろうか。

彼が言おうか言うまいか逡巡している間に、わたくしの思考は悪い方に流れていく。

既にひっそりと子供をこさえているか。

実は他に好きな相手がいるか。

それともその両方で、恋人を愛人として迎え入れたいだとか――

「僕は……僕は……！」

「え、ええ」

ゴクリと生唾を飲み込んで、真っ直ぐこちらを射貫いてくる青い瞳を見つめ返す。

頭の中では悪い想像がグルグルと渦巻き、とうとう「君が邪魔なんだ！」と刺されるところまで到達した。

わたくしは『どうか穏便に済みますように』と祈りながら、夫と
なった人を見つめる。

「僕は、——童貞なんだっ！」

「……っ！——、……？」

ああ、そんな……！と返そうとしていた口が、ピタリと止まる。

そして頭が真っ白に染まったまま、わたくしの口から声が漏れた。

「………はえ？」

何と間の抜けた声なのだろうか。

けれどそれも仕方の無いことだろう。

彼は今、何と言ったのか。

（——童貞？）

はて、その言葉の意味は何だったか。

いや、知らないわけではない。

言葉の意味なんて分かりきっている。

それなのに理解が出来ないのだ。

「女性とお付き合いをしたこともない。デートもない。キスだって今日の挙式でしたのが初めてだった」

「えっ？……えっ？…えっ？」

いや、そんなはずはない。

アドルフはこんなにも見目の良い男性——そう、男性なのだ。

この国では稀有な存在である男性。

共学の学園にも通っていた。

狩人達が沢山いる、貴族学園に長年通っていたのである。ハント
されていないわけがない。

「手を繋いだのだって、君としか経験がない。エスコートだってどんなに頼まれても他の女性には絶対にしなかった。僕は……っ!!」

「はえっ？」

最後の最後で突然声のボリュームが跳ね上がって。呆然としていたわたくしは、ガシリと両肩を掴まれた。

「いや、僕もっ！君と、君だけと愛し合うことだけを夢見てきた！けれど君は僕を男として意識してくれないし全然興味を持ってくれないし僕というより女友達と居る方が楽しそうだし何なら僕の男友達からほのかに憧れられているしやたら可愛くて腹が立つしああでも、もうそんなことはどうでもいいっ！君は僕のものだ!!」

「は、あえ……？ええ……？」

いつもの顰めっ面が嘘のように、アドルフは晴れ晴れとした顔で笑っていた。

パアアツと笑いかけられた後に、ガバリと抱き締められる。

あまりの勢いにわたくしの体は後ろに倒れていったが、広くて柔らかな寝台は優しくわたくし達の体を受け止めてくれた。

「ああ、やっと夫婦になれたっ！ずっと、ずっと、君が好きだったんだ……っ！もちろん過去形ではないぞっ！今でも心から、君を愛している!!」

「お、おお……」

こんなにも驚いているのに、まだ驚愕する事実が残されていた。嫌われているとばかり思っていた許嫁のあの態度は、どうやら好きの裏返しだったようだ。

つまるところ、素直になれなくて気難しくなっていたアドルフと、それを理解出来ずにいたわたくし。

そしてそのわたくしは彼の見目があまりにも良すぎて、裏切られ

ることを恐れていた。その結果、無闇に距離を起きすぎて。より二人の関係が拗れてしまったというわけなのだろう。

そう考えると本当に、申し訳ないことをしてしまった。

昔から母に、『思い込むと考えを変えない悪癖がある』と度々注意されてきたが——今初めて、それを自認した。

まごうことなき悪癖だ。お母様の言う通りだった。

いやそれはそうとしても、アドルフの好意はとても分かりにくかった。誤解してしまうのも仕方がないだろう。

「……ああ、そうだっ！今夜はたっぷりと理解らせるんだったな♡ふはは、朝まで付き合ってくれよ？」

「え、朝まで……？そんなにするの……？」

上目に見つめておずおずと問いかけたわたくしに、アドルフは大きく頷いた。その顔は、ニコニコだ。

閨教育では殿方がしたいだけ付き合うようにと言われたが、せいぜい多くて三回ほどだと言われていた。

三回と言うのは、殿方が達する回数だ。

さっきの一回だとすると、朝までならあと二回どころでは済まないだろう。

世の中には『絶倫』という、底無しの人もあります。そう言っていた講師の顔が、脳裏にチラついた。

「あの……お手柔らかにね？」

「ああ！この日のために、何度もシミュレーションをしてきたんだ。愚行は犯さないさ」

胸を張って高々と宣言したアドルフは、嬉々としてわたくしの唇を吸った。

それから少しだけ緊張した様子で、再びわたくしのガウンを開く。

「お、おおお……♡」

左右に開かれたガウンの下から、透けた乳房が現れた。

気恥ずかしさにわたくしが膝を擦り合わせていると、今度はガバリと思いつきりガウンを開かれ？。

「おお、素晴らしい……。まるで……。ああ、芸術品のようだ……」

「……っ」

震える手がこちらに伸ばされて。壊れ物を扱うようにそつと、左の乳房が掴まれた。

——いいや、掴まれたとは言えないかもしれない。

あまりにもソフトタッチがすぎて、彼の右手は胸に添えられているだけであった。

「や、柔らかい……」

「んん……♡」

恐る恐るといった様子で乳房を揉まれて、わたくしは擦ったさに身動いだ。

わたくしが嫌がつていないと上目で確認したアドルフは、これまた恐る恐る左手でも乳房に触れてみた。

「す、すごいな。これが女性の――きみの、おっぱい」

青い瞳を蕩けさせて、アドルフはわたくしの胸を見つめていた。

柔らかな山が彼の手で形を変える様は、何とも淫靡だ。

彼も同じことを思ったのだろう。ゴクリと生唾を飲んで、食い入るように見つめていた。

（それにしても、おっぱい……ね）

気難しいアドルフの口から放たれるには、あまりにも可愛らしい響きだった。

キュンと胸が甘く痺れて、緩く口角が上がる。

少しだけ躊躇ったあと、勇気を出して。わたくしは右手でそっと、彼の髪に触れてみた。

「ああ——もっと、僕に触れてくれ。もっともっと、君を感じたい」
いつもは冷たい瑠璃色の瞳。それが今は、グツグツと煮立つような熱を秘めている。

そんな瞳に真っ直ぐ見つめられ、射貫かれたわたくしは——頭を興奮でクラクラとさせながらも、しっかりと頷いてみせた。

「ん、んっ♡ふ、う……♡」

「ありがとう、嬉しいよ。どうか沢山撫でてくれ」

様子を見ながら少しずつ力を加えられて、ゆっくりと両手で乳房を揉まれる。

ただ優しくマッサージされているだけに心地好くて。わたくしは右手で彼の髪を後ろに撫で付けながら、少しずつ呼吸を乱して

いった。

「桃色の先端が……ぷっくりと勃ち上がってきたな」

「やつ、はずかしい」

手の平で触れているのだから気付くのは当然だが、わざわざ口に出さなくともいいのに。

わたくしはクイツと彼の髪を引っ張って、意地悪を咎めた。

「っ♡♡♡なんだそのいじらしい抵抗はっ♡♡もしかして、僕を煽っているのかっ!？」

「……きゅんっ!？」

すると突然、両胸の先端を摘ままれた。

体に甘い衝撃が走り、わたくしは動揺する。

ビリビリとした刺激が背筋を通り、腰を砕けさせた。

彼の頭を撫でていた手は力が入らなくなって。ポスリとシーツの

上に落ちる。

「くう、可愛いな……っ！君はどうしてそんなに逐一可愛いんだ!？」

「え、えっ？しらな……っ、あっ、まって♡」

いつものように言葉で詰られているのに、いつもより格段に詰られ方が甘い。

髪を引っ張って意地悪を咎めたつもりが、そのせいで状況が悪化している。

わたくしは頭を混乱させながらも口から甘い声をこぼしていった。
「こんなに、コリコリにさせてっ♡♡僕を誘っているとしか思えな
いっ♡♡♡」

「や、あんっ♡あ、んんっ！」

わたくしの腰を跨いで覆い被さっているアドルフは、わたくしの
頬や顎、鼻先、額にまで。興奮した様子で何度も口付けていく。

その間にも指の腹で挟まれた乳嘴は、絶えず刺激されていた。薄い布越しに擦られる感覚はえも言えぬ、たまらないものだ。

「ふう、ふう♡さて、これは——ああ、このリボンをほどけばいいのかつ♡」

「あ……っ」

彼の右手が乳首から離れたと思えば、素早くシュルリと肩のリボンがほどかれる。

そしてすかさずペラリと布地を捲られて、左胸が露になった。ツンと尖った先端すらも、明るい中で曝されている。

「あの、明かりを、ああッ!？」

今更ながらに明るい室内で事に及ぶのは恥ずかしいと。そう判断して明かりを絞ってもらおうとしたが、遅かった。

断ることなく顔を寄せたアドルフがパクリと乳嘴を口に含み、尖

った先端を舌で柔く弄び始めたのだ。

「はーっ♡はーっ♡んぢゆるっ♡はーっ♡」

「んんっ♡はっ、だめっ♡あ、うんっ♡♡」

優しく舌で撫でられ、時折ちゅるりと唇に吸われる。

そうして愛でられる左の乳首から甘い快樂が生じて、初めての経験にわたくしはふるふると体を震わせた。

「あっ、あっ、同時はだめっ」

「はあ……♡可愛い……♡」

その上右胸は指での刺激を再開されて、下腹部がムズムズと落ちて着かなくなった。

駄目と言っても綺麗に流されてしまい、愛撫は継続される。

「ああ、なんて可愛らしいんだっ♡♡」

「あんっ！やだ、優しくしてっ♡」

今度は右の先を強めに摘ままれて、指の腹でスリスリと擦られる。敏感な突起を直接舐められる甘い感覚と、布越しに強く責められる強引な快感。

違ったアプローチで左右同時に刺激されているわたくしはもう既に、いっぱいだった。

「んんっ♡あふっ、やさ、しくうっ♡♡」

注文をつけながらも、たまらない快感にわたくしは膝を擦り合わせる。乳首を弄られれば弄られるほど、割れ目の奥がきゅんきゅんとして仕方がない。

「はあ、こっちも……♡」

「あっ！ねえっ、あっ♡んん……！」

今度は右の先端を夜着の生地ごと、口に含まれてしまった。

口での優しい愛撫と、指での強かな責め方。

左右が交代してしまつて、突然の変化に動揺した体が戦慄く。

「ん、ぢゅ……っ♡こりこり、だ……♡」

「はっ、あっ♡んうっ♡♡あんんっ♡」

指で捏ねられ、口で甘やかされる。

双方の刺激が気持ち良くて、わたくしの体は蕩けていった。

「っ、ふー……っ。やっぱり、直接がいいな」

「あ、ああっ！だめっ」

布地を口に含む感触が不快だったのか、それと肌を直接舐めることが気に入ったのか――

アドルフは右のリボンもシユルリと、ほどいてしまった。

「もう……っ！アドルフ、わたくしの話を聞いてっ」

「んー？」

明かりを消してほしいという願いは未だ告げられておらず、駄目

と何度言っても綺麗に流されている。

震える手を上げて再度キュツと金の髪を後ろに引っ張れば、アドルフは青い瞳をトロリと蕩けさせてわたくしを見つめた。

けれどその口は、手は。わたくしの乳首を捉えたままだ。

「あかりを、けしてっ♡やさしくっ、して、ほしいのっ♡♡」

「……♡♡♡」

指先でコリコリと左を捏ねられ、ねつとりと右を舐め回される。

右の乳房は先端だけではなく下乳もペロペロと舐められていて、彼が楽しんでいるのが分かった。

「充分優しくしているだろう？」

「でも……っ！ ああっ♡ふあ、 あんっ♡♡」

カリツと前歯で突起を噛まれても痛くはない。確かに優しくはしてもらえている。けれど、そういうことではないのだ。